

研究報告

「総合施設」についての検討
— 保護者の思いから見えてくるもの —

後藤 晶子 上月 素子 柳原 利佳子

A Research on the Contemporary Nursery School
— How do Parents Feel and Think ? —

Akiko GOTOH Motoko KOZUKI Rikako YANAGIHARA

SUMMARY

The new day care center system for early childhood has just started from 2006 which includes a nursery school part and a kindergarten part in the same organization. Here we call it a contemporary nursery school.

How do the parents whose children are attending the new facilities think and feel? Are there any differences between the thoughts or the feelings of parents in the nursery school part and those of parents in the kindergarten part?

And also are there any differences between those of parents in the nursery schools of the new system and those of parents in the typical nursery schools? To get the information about above mentioned matters is important not only for the facilities themselves in the future but also for our education.

We carried out a questionnaire survey to research the thoughts of parents in the facilities in Kobe city which has adopted the system for long time and also in the typical nursery school in Kakogawa city.

We can see the efforts of the facilities which have long experience of that system. We also think that the thoughts and behaviors of parents are influenced by the characteristic of the local community. We can also get the useful information for our education.

1. はじめに

幼稚園、保育所の機能を併せ持つ総合施設として認定子ども園の導入が2006年度より始まった。

2004年度我々は、その総合施設について先駆的に取り組んでいるいくつかの施設を視察した。様々な取り組みや工夫が見られる中、その効果がそこに預けられている子どもたちや保護者にどのよう

にみられるのかを把握することが早急の課題と考えられた。すなわち行政の一方的な号令による動きが見られる中、保護者のさまざまな思いに応えることや、そこで育つ子どもたちに望ましい効果があることを検証していくことは欠かせない視点である。さらにこの状況下において、保育者養成校にはいかなることが求められるのかも把握しておかねばならない。

そこで2005年度に、総合施設の取り組みをしている施設と、そうでない保育所の保護者に対してアンケート調査を実施し、保護者の思い、子どもの育ちのとらえ方の違いを把握するとともに、求められる保育者像を探った。ここではその一部を報告する。

2. 方 法

1) 対象

総合施設として、神戸市のA施設にアンケート調査をお願いした。

コントロール群として、加古川市のB施設に依頼した。

総合施設としては、当初交野市のC施設を念頭においていた。昨年度視察した際、市の「子ども対策室」の担当者に了解を得ていたからである。しかし4月に市担当者の移動があり、新しい担当者にも連絡をとり、再度了解確認を得ていたところが、実際にC施設を訪れた際に誤解のあったことが判明したため、C施設を対象とすることをあきらめた。急遽いくつかの施設をあたり、A施設が引き受けて下さった次第である。その時点では、交野市C施設と比較する上で妥当な地域性という観点から、すでに加古川市の保育所をコントロール群として選び、アンケートを依頼していた。そのため、地域性では多少バランスに欠けるところが生じている。

2) アンケート項目の策定

交野市のC施設では、保護者会によって、保護者の感想文がとりまとめられている。その内容を

分析すると、以下の4点が浮上した。

- ①異質性の受け入れ、視野の広がり…これは保護者・子ども双方に、いろいろな生活形態のあることや生き方のあることが理解できるということである。
- ②地域社会に対する意識・態度が変わる…降園後の生活の広がりや地域生活者としての自覚が深まる。
- ③子どもに対する意識の変化…子どもは皆で育てるものという意識の芽生え。
- ④行事等における保護者の負担をめぐる葛藤…長時間保育児と短時間保育児のそれぞれの保護者の役割が平等にならないことに由来するものである。

以上の事項を参考にしながら、子どもの発達についての感じ方を数量的に把握できる質問や、地域社会とのかかわりや降園後の生活の広がり等についての様相をとらえる項目、その他記述項目を設定した。さらに保育者養成に求められるものを把握できる質問項目を策定した。

なお総合施設という形でアンケートを準備していたところ、A施設では「一元化」という形で保育を進めているということで、アンケートでは「一元化」を使用した。

3) アンケート実施日

A施設	2006年1月23日	依頼
	配布数 … 226	
	2月6日	回収
	回収数 … 123 (回収率 … 50%)	
B施設	2005年12月13日	依頼
	配布数 … 92	
	12月26日	回収
	回収数 … 86 (回収率 … 93.5%)	

3. 結果と考察

1) それぞれの園の子どもの状況

A施設、およびB施設の子どもたちの月齢や、通園開始時期についての状況は表1の通りである。

表1 回収されたアンケートの園ごとの子どもの状況

	A施設長時間児	A施設短時間児	B施設
回収された人数	37	86	86
子どもの月齢 平均	53.78 (4歳6ヶ月)	67.9 (5歳8ヶ月)	51.05 (4歳3ヶ月)
S D	18.13	8.43	18.78
通園開始年齢 平均	1.57	3.5	1.94
S D	1.35	0.53	1.23

A施設については、長時間児と短時間児に分けて示す。

なお「長時間児」とは、保育所児のように、幼稚園の時間帯が終わると降園しないで午睡をするなどしてその後保護者の迎えの時間まで施設で過ごす子どもを指す。また「短時間児」とは、幼稚園の時間帯が終わるとすぐ降園する子どもたちのことである。

2) それぞれの質問項目の結果の概要と考察

①A施設の長時間児と短時間児で、それぞれ自分の降園時間を子どもがどのように受け取っているのか、保護者の推測した様子を図1、図2で示した。相対的にみると、長時間児では、〈早く帰りたい〉が〈残るのがうれしい〉を上回り、

短時間児では、〈もう少し残りたい〉が〈早く帰るのがうれしい〉を上回っていることが示され、それぞれ自分とは違う他者がうらやましい思いになりやすいことがうかがえる。長時間児・短時間児ともに、最も多いのは〈時による〉で、子どもたちはいつもいつも他者をうらやましがっているばかりでもないということもうかがえる。

②通園してから子どもが成長したという保護者の実感を得点化し、観点ごとに表2ならびに図3に示しておく。園を独立変数、観点を従属変数として一要因分散分析を行った結果、有意差が示されたのは、〈意欲的〉〈頑張る〉〈きまりを

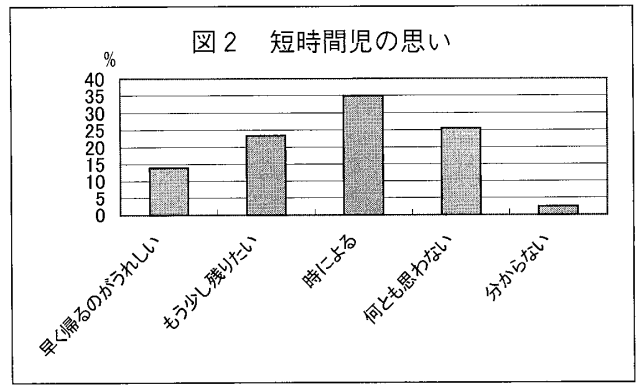
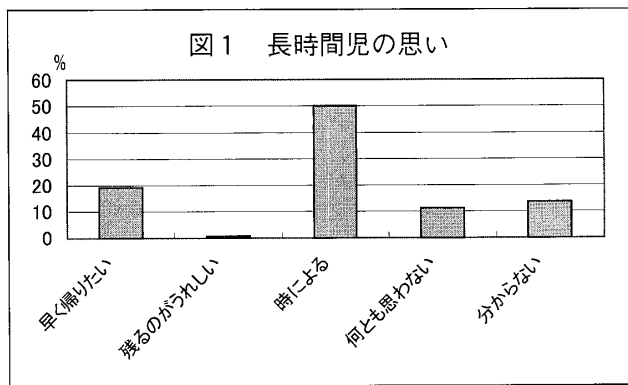
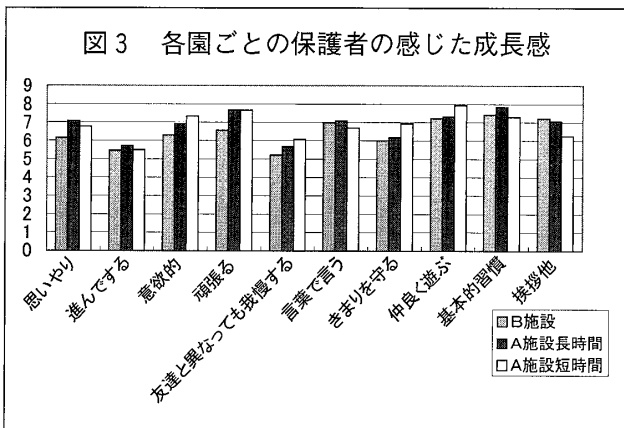


表2 各園ごとの保護者の感じた子どもの成長

(平均得点 数値の高い程成長感あり、得点範囲9~1)

	思いやり	進んで する	意欲的	頑張る	友達と異 なっても 我慢する	言葉で 言う	きまりを 守る	仲良く 遊ぶ	基本的 習慣	挨拶他	人数	月齢平均	通園開始
① B施設	6.15	5.46	6.32	6.56	5.22	6.98	6	7.23	7.42	7.22	86	51.047	1.94
② A施設長時間	7.08	5.71	6.92	7.67	5.67	7.08	6.19	7.32	7.83	7.06	37	53.784	1.57
③ A施設短時間	6.77	5.49	7.33	7.66	6.08	6.69	6.93	7.92	7.29	6.26	86	67.9	3.5
有意差	n.s.	n.s.	①と③ p<.05	①と② p<.001 ①と③ p<.001	n.s.	n.s.	①と③ p<.05	n.s.	n.s.	①と③ p<.05			

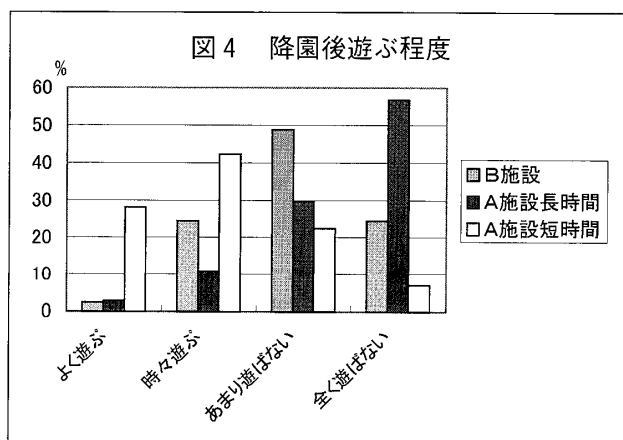


守る)〈挨拶や感謝、謝ることができる〉であった。そのうち〈頑張る〉については、B施設とA施設の長短いずれともで有意差がある。さらにB施設とA施設短時間児とでは、〈意欲的〉について有意差が示され、〈思いやり〉についても傾向がみられる。それぞれの施設の保育方針や子ども達へのかかわり方の違いということに由来することも考えられる。〈きまりを守る〉については、A施設の短時間児が最も得点が高く、この子ども達の年齢平均が他の子ども達より10ヶ月以上高いことが反映されているのではないと思われる。しかしそのような年齢差があるにもかかわらず、〈挨拶や感謝、謝ることができる〉に関しては、A施設短時間児に比べ、B施設児は得点が高いということが示され、またA施設長時間児も相対的に短時間児よりも高い得点を示している。さらに〈自分の思いを言葉で伝える〉〈基本的生活習慣〉についても、A施設短時間児は年齢が高いにもかかわらずさほど得点は高くない様相である。これらのことから、長時間の保育所生活で育つものが推測されるが、これを正しくとらえるためには、年齢をはじめ様々な条件を整えて調べる必要がある。

〈友達と異なっても我慢する〉という項目は、交野市C施設保護者感想文の分析から浮上した観点である。今回の結果では、B施設よりも、一元化施設であるA施設の方が得点は相対的には高かったものの、有意差はみられなかった。回答数、地域差、年齢の違い、保育所の違い等

様々な要因が関与している結果であると考えなければならぬ。ただこの項目を具体的な場面から判断できる状況は、保護者にとってあまり頻繁にはないであろうし、成長感として速効的にとらえられるものでもなかったことも考えられる。

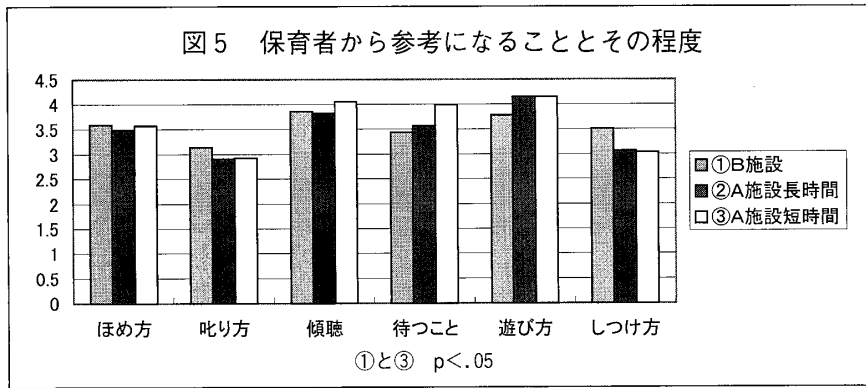
③降園後、近隣で遊ぶ機会について、回答数をパーセンテージにしたものを図4で示した。A施設の短時間児、長時間児を比較すると、早く降園する短時間児たちは遊ぶ機会が多いのに比べて、



長時間児では〈全く遊ばない〉回答が多くなっている。しかし同じ保育所児であっても、B施設児では〈あまり遊ばない〉が相対的には最も多くなっており、〈時々遊ぶ〉も〈全く遊ばない〉と互角の回答数になっている。これはA施設は団地内にあり、いったん帰宅すると外に出にくいのに対し、B施設は、一戸建ちの住宅が多い地域にありA施設よりも都会化が進んでいないので、近隣づきあいがまだ多いであろうことが反映していると考えられる。

④保護者が園の保育者のあり方をどの程度参考にするのか、項目ごとの結果を図5に示した。

〈ほめ方〉〈傾聴〉〈待つこと〉〈遊び方〉については、どの園でも〈どちらとも言えない(3)〉以上の得点を得ているので、保育者のあり方は、保護者の子どもへの関わり方について多少ともモデルともなりうると保育者は自覚することが必要ということが言える。〈しつけ方〉〈叱り方〉は特にA施設ではほぼ〈どちらとも言えない〉

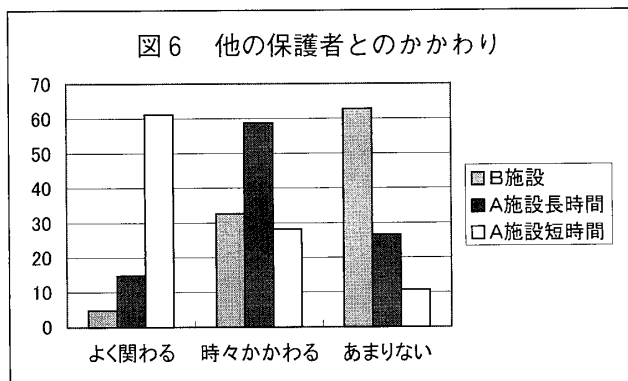


ことが示されている。

数値が4（やや参考になる）を越えたのはA施設短時間児の〈傾聴〉と、A施設の短・長時間の〈遊び方〉だけであった。保育場面に保護者はさほど接点を持たないことに由来するのではないかと考えられる。保育者養成校としては、親の子育て力の低下が問題になってきている時代社会の中で、より保護者のモデル足りうる人材を育成することだけでなく、より積極的に子育て力の向上の機会を提案していくことが必要と受け止めている。

園を独立変数、参考になる観点を従属変数とした一要因分散分析の結果、有意差が示されたのは〈待つこと〉のみであり（P<.05）、園のあり方あるいは子どもの年齢も反映していると考えられる。ただ今回のこの質問項目は、園のあり方を検討する目的のものではなく、保育者が、保護者の方から如何に見られているのかを学生に伝えたい目的で設定しているものである。このことについてはB施設の保護者から一件お尋ねもあるので、そのような回答を考えている。

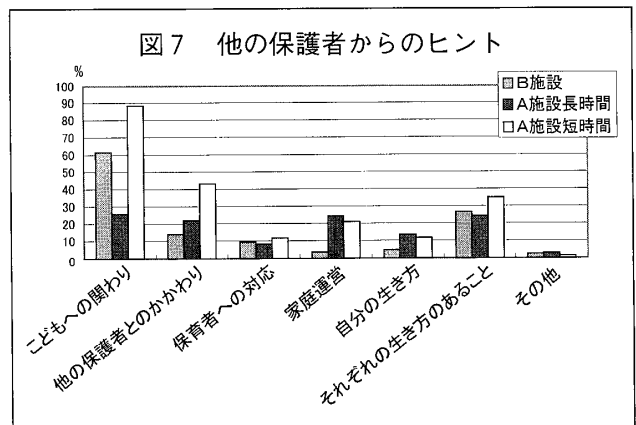
⑤他の保護者との関わりについて回答を相対的に



示したものが図6である。A施設短時間児の保護者が〈よく関わる機会がある〉こと、およびB施設の保護者が〈あまりない〉は予測された通りであるが、A施設の長時間児の保護者は同じ保育所ということであっても、B施設の保

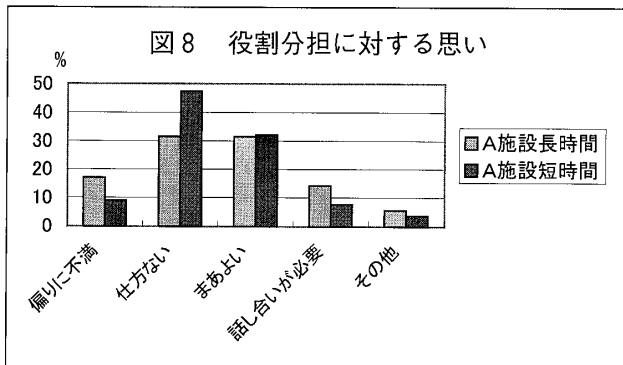
護者と少し様相が異なるように見受けられる。短時間児の保護者がいるという影響によるものか、その他の園の体制によるものかはここでは判断はつかない。いずれにせよ、人間関係の輪を広げるありかたの示唆が得られる可能性がある。

⑥上記他の保護者との関わりの中で、どのようなヒントを得ているのかについて、回答を相対的に図7に示している。複数回答可であるので、



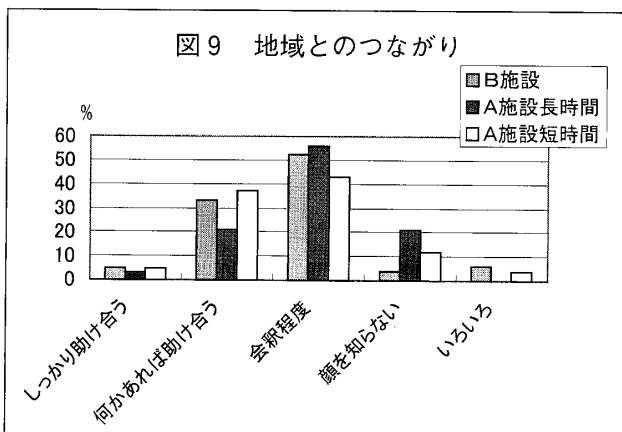
総数は100%を越える。A施設短時間児の親が他の保護者とのかかわりが多い分、回答数も多くなっている。いずれの園でも〈子どもへのかかわり〉が参考になるという回答が多い。多くふれあう機会のあるA施設短時間児の保護者は、いろいろな点でヒントを得ていると回答がみられたが、ふれあう機会の少ないB施設の保護者からも、〈子どもへの関わり〉〈それぞれの生き方のあること〉などの回答が寄せられており、他の保護者とのかかわりを持つことは、視野の広がりとなる機会となっていることがうかがえる。

⑦A施設で、短時間児と長時間児の保護者で行事等の役割分担のあり方についての意見を相対的に示したものが、図8である。長時間児・短時



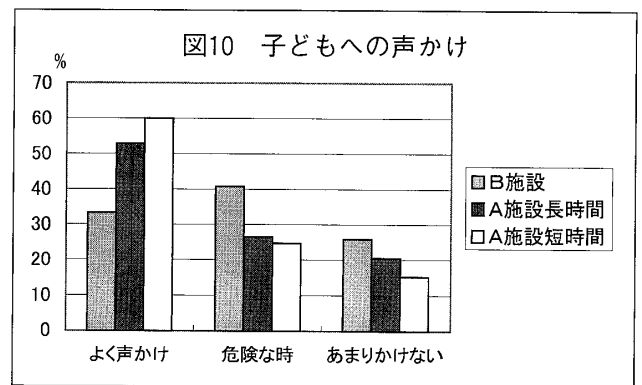
間児を同じ施設に抱えるこのような体制の中では、役割分担が短時間児の保護者の負担になりがちなので、そこからの不満が噴出するのではと考えられたが、若干の不満がいずれの側の保護者からも出てはいるが、〈仕方ない〉〈まあよい〉という回答が多く、保護者の理解、園側の運営の適切さがうかがえる結果となっている。ことに役割負担が増えるであろう短時間児の親は半数近くが〈仕方ない〉と受け止めている。理解にいたっているかどうかは分からないが、〈不満〉は長時間児の保護者よりも少ない。しかし〈話し合いが必要〉という回答もみられたり記述回答にも意見が寄せられており、またこのA施設の回答回収率が50%であることを考えると、行事等の運営体制は絶えず検討していかねばならない課題であろう。

⑧地域とのつながりについて、それぞれの園の相対的な回答分布は図9の通りである。どの園で



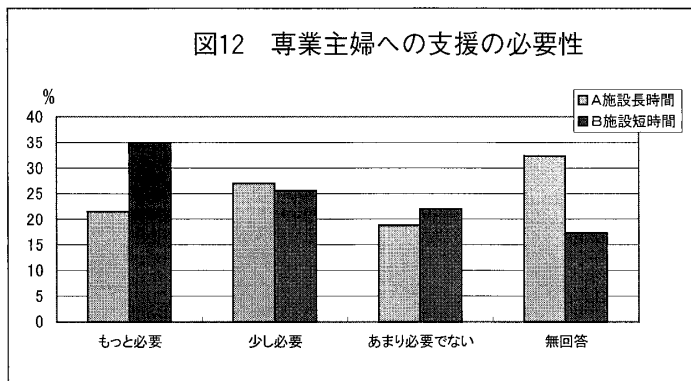
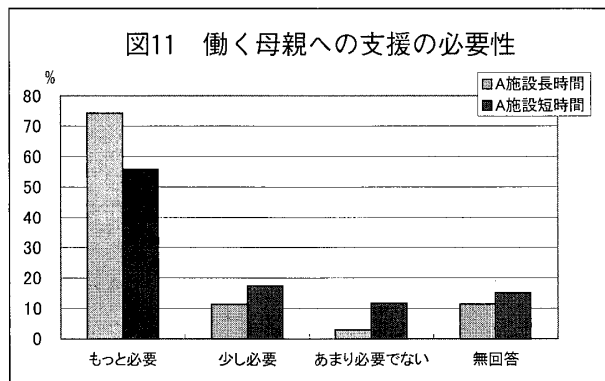
も最多の回答は〈会釈程度〉となっている。今の社会の様相が垣間見られる。そのような社会であっても、短時間児の保護者の方がより地域密着の生活が展開しやすいだろうと予測される。しかしA施設の短時間児・長時間児の比較ではその傾向が見受けられるが、B施設では、〈何かあれば助け合う〉がA施設短時間児保護者とほぼ同じ程度あることも見受けられる。一般的に、近所づきあいは都会化が進むことにより疎遠になるとされている。A施設に比べてB施設のある加古川では、まだ地域との結びつきが残る生活形態が展開していることがうかがえる。

⑨近隣でよその子どもに出会ったときの声かけの状況は、図10にパーセンテージで示した。相対



的にみると、B施設では、〈危険なとき〉がピークとなっているのに対し、A施設では短時間児・長時間児いずれの保護者も〈ふだんからよく声かけ〉の頻度が高い様子である。急遽アンケートをお引き受けいただいたA施設は、過去に子どもをめぐる悲惨な事件の起きた地元であり、そのような事件が二度と起きて欲しくないという親の思いは切実なものと考えられる。保護者は我が子だけでなく、よその子どもの安全にも心を配らねばという意識を持っていることがうかがえる。

⑩働く母親への支援の必要性、専業主婦への支援の必要性について、A施設の保護者にお尋ねした。結果は、それぞれ図11、図12の通りである。働く母親への支援については、長時間児の保護者と短時間児の保護者の回答はよく似た様相を



している。すなわち専業主婦もありパートもあ
りの短時間児保護者たちも、働く母親への支援
が必要という思いを持っていることが分かる。
それに対して専業主婦への支援についてはそれ
ぞれの意見に分散している。ことに長時間児の
保護者の〈無回答〉がその他の回答に比しても、
あるいは短時間児の保護者の〈無回答〉に比し
ても相対的に多い。〈支援がもっと必要〉以外
の回答数が多いということであり、長時間児の

保護者にとって、専業主婦のあり方には関心は
向きにくい様子が見えてくる。

この働く母親への支援については、〈もっと
必要〉という選択肢を選んだ場合には更に具体
的に記入していただいているので、表3に分類
して示しておく。

表から、働く母親は子どもの病気の時が困る
という切実な思いがよみとれる。保育所にも対
応してもらいたいと同時に、職場でも就業時間

表3 働く母親に対する支援内容

保育所の充実 44	病児への対応	19
	時間の融通	7
	安心して預けられる	6
	職探し時機にも預けたい	2
	数と場所を至便に	3
	預かり保育をしてほしい	3
	現行保育所運営のあり方（役割分担の調整がほしい）	4
職場環境の改善 16	休みを取りやすい（子どもの病気の時、育休、産休）	14
	育休後のポストの保証	1
	職場にも保育者を	1
社会体制の整備 11	経済支援	5
	学童期の支援 4	4
	社会の意識（性役割の変革）	2

表4 専業主婦に対する支援内容

子どもの一時預かりの拡充	14
母親の心のサポート	9
社会のありかた	7
働きやすい社会	2
夫の協力	2
地域貢献することももっと尊重されてしかるべき	1
経済支援	2

等の対応を求める数が多い。また働きたいと思う中で、学童期にはいる時の不安がでてくる様子も見えている。

専業主婦に対する支援の具体的記述は表4に示した。

専業主婦でいることが必ずしも本意ではない人もいること、働く保護者が多い中で、地域社会を支えることに力を尽くしている人がいてこそ、地域社会が成立していることについて十分な理解が行き渡っていないこと等の指摘があり、くすぶった思いが感じられる。そして何よりも専業主婦でいることは、一人で子どもと四六時中向き合っていないとではないしんどさを感じやすいことが読み取れる。子どもは将来の社会を形作っていく人材であり、母親一人に押しつけずに、効果的な支援をしていくことが求められる。

⑪保育者養成校への要望の記述もたくさんいただいたので、以下分類して概要を示しておく。

○子どもと向き合うことのできる …18

- ・一人ひとりの子どもを理解できる（家庭背景、個人差等）
- ・子どもの気持ちを考えてくれる、子どものサインを受け止められる人
- ・子どもを分け隔てなく、人格を持った存在として対応してくれる
- ・子どもや保育者同士とのあたたかい人間関係を結べる人
- ・子どもとゆったり行事を楽しめる
- ・育児にきちんと対応できる
- ・心から子どもが好き、母親の替わりをしているという心構え
- ・愛情を持った叱り方のできる、叱る意味を理解した人

○保護者対応のできる …9

- ・働く母親への理解
- ・保護者との対応の仕方を知っておく
- ・いつもと子どもの様子が異なる時には保護

者に一声かける

- ・保護者にも要望して協力して子育てをしていくという態度

・正直に話してくれる人

○実習を増やす …7

○人格の涵養 …5

○発達についての十分な知識 …3

○危機管理の教育 …1

○体力強化、ストレス対策のできる …2

○保育内容が適切なものができるように …5

このように具体的に記述していただいた中からは、自分の子どもへの対応を適切にしてもらいたいという保護者の思いがしっかりと伝わってくる。保育者としてプロフェッショナルな対応ができると同時に、倫理観も備えた人間性豊かな愛情豊かな人が求められている。

また保護者への対応についても、子どもと一緒に育てていくという立場を自覚することや、またその自覚に基づいて、積極的に保護者にかかわったり、親の気持ちも受け止める力も求められている。

実習を増やすことの提案もいただいております。その提案からは、あまり子どもに関わる体験が少ないのではという実感を、保護者の方は感じておられることが伝わってくる。

その他一件ではあるが、危機管理の能力の育成もなおざりにしてはいけないという重要な指摘も寄せられた。

これらの要望は、一言で言うと、まさに本学科の教育理念であり教育目標である。しかし具体的な言葉からは、理念や目標といった抽象レベルではなく、求められる保育者のあり様が明確に伝わってくる。子どもとのかかわり、保護者とのかかわりについて適切に実践できる保育者養成が求められている。

なお、この養成校への要望の箇所でも、A施設の保護者の方から、一元化やA施設に関わることもについても記述をいただいている。主な内容は以下

の通りである。

- 「一元化」は大人の枠組みであり、子どもの教育にはかわりはない … 2
- 一元化はよい
 - ・子どもが分け隔てなく遊べるので … 1
 - ・長時間児の保育がマンネリにならず、子どもが楽しそう … 1
- 一元化には長・短所がある
 - ・長時間が優先のように思う … 2
 - ・考えが幼稚園的なので負担感がある … 1
- A施設のあり方がよい、先生がよい … 3

親の働き方によって子どもが差別されないようにということを保証しようと、総合施設、一元化が推進されてきた。子どもの立場からの記述では、2例ではあるが、楽しそうに分け隔てなく遊べるという回答が寄せられてはいる。しかしまた一方で長所短所がある旨の記述もみられる。

一元化として経験のある施設において、保護者間の役割分担にみたように、園の尽力のほどがうかがえる面もあり、いろいろな問題も散見できる状況にあることがうかがえる。

保護者が子どもを預けるに際して、役割分担も含めて納得したり安心できることが、保護者の心の安定につながり、保護者と連携しながらの子育てにつながっていくと言える。まだ始まったばかりの認定子ども園が、より効果的に、保護者が安心納得して子どもを預けることができる施設となるためには、既設園から学んだ情報を共有していくことが求められるのではないだろうか。

4. まとめと展望

一元化施設としてのA施設の子どもたちは、短時間児、長時間児ともに、少し自分とは違う子ども達をうらやましく思いながらも、その時々いろいろな思いを感じながら生活していると保護者は受け止めているようである。

通園を始めてから、子どもが成長したと感じていることがらについては、地域差や年齢差、ある

いは園の違い等が反映されていると考えられる。その中でも、保育所児の方が集団で生活する時間の長いことから、態度や習慣の中で育ちやすいものが推測された。

交野市C施設の保護者感想文に見られた〈異質性の受け入れ〉については、有意な効果は見られなかった。ただ自分とは異なるあり方に絶えず接している体験は、何らかの形で将来的に影響を及ぼすのではないかと考えられる。その影響を適切にすくい取る問題設定の工夫をした上で、総合施設で育った子ども達のその後の調査がのぞまれる。

また、降園後の子どもの遊び方や保護者の近隣の人々とのつきあい方、子どもたちへの声かけのいずれにおいても、地域性が強く感じられた。このことは言い換えると、地域のあり方は保護者のあり方に強く作用するということであり、保護者を支援したり意識・態度に働きかけようとするときには、地域のあり方を考慮したり、地域の持つ力をうまく活用していかねばならないということである。

保育者養成に関しても、今後より実践的な力を養成する必要性を指摘していただいた。

今回は、保護者の方へのアンケートであったが、その結果からは、園の運営についての工夫や努力が多分に示唆された。そのような工夫努力を、今後の総合施設に共有されてこそ、より運営が適切なものとなるであろう。個々の施設が情報提供を個別に求めていくよりも、統括する立場から、行政が情報収集・情報提供があっただけではないかと思われる。

今回の調査研究にあたって、年末あるいは年度末のご多忙な中、アンケートにご協力いただきましたA施設、A施設の保護者の皆様、加古川市、加古川市B施設、加古川市B施設の保護者の皆様に厚くお礼申し上げます。

いただきましたアンケートは、個人情報が増上しない形でデータ処理をさせていただきましたことを、あらためて付記いたします。